盛会だった第10回総会・懇親会

═══ 59年6月29日（金）═══

50年6月東京会館で結成大会を開いてから10周年、今年の総会も築地スエヒロにおいて、百名の若人も含めて三百六十名が参集、岳南健児の意気を示し、大いに懇親の実を挙げた。

昭和58年度　静中・静高関東同窓会決算書

（S 58 4.1～S 59.3.31）

Ⅰ 収　入		
57年度繰越金		576,480円
〃　会費	（9名）	18,000円
58年度会費	（965名）	1,851,000円
59年度会費	（2名）	4,000円
広告料		380,000円
寄付金		25,000円
預金利息		9,494円
総会収入		229,920円
雑収入		6,000円
計		3,099,894円
Ⅱ 支　出		
会報		440,000円
名簿		750,000円
郵送費		797,160円
印刷費		112,000円
人件費	（アルバイト料）	100,000円
消耗品費		71,900円
事務用品費		1,070円
交際費		25,000円
雑費		9,100円
会合補助費		252,340円
植代		150,600円
計		2,709,170円
Ⅲ 残　高（次年度繰越）		390,724円

上記監査の結果適正であることを認めます。

昭和59年5月17日

監事　村松　直

監事　村井東助

昭和59年度　事業計画

1. 総　会　年1回
2. 顧問会　年1～2回
3. 幹事会　年5回位
   顧問会と幹事会は合同でやる場合もあります。
4. 会報の発行　年2回（6月・11月発行）
5. 懇親会　ゴルフ大会（年2回）
   釣り大会、ハイキング大会（年1回）等

昭和59年度　静中・静高関東同窓会予算

（S 59.4.1—S 60.3.31）

Ⅰ 収　入		
繰越金		390,724円
年会費	2,000円×1,000人	2,000,000円
広告収入		300,000円
計		2,690,724円
Ⅱ 支　出		
会報発行費		480,000円
名簿発行費		150,000円
消耗品費		80,000円
郵送費		650,000円
印刷費		120,000円
人件費		100,000円
事務用品費		5,000円
会合補助費		250,000円
予備費・繰越金		855,724円
計		2,690,724円

静中・静高関東同窓会　会報

静中・静高関東同窓会
会報　第18号
昭和59年12月5日発行
編集人　月見里得知郎

その後の同窓会活動

◆幹事会　59年7月19日（木）
35名出席

◆幹事会59年10月4日（木）
36名出席

◆正丸峠・伊豆ケ岳ハイキング
59年11月18日（日）8名参加

鈴与株式会社
取締役会長　鈴木与平（44回）
清水市入船町11－1
TEL（0543）53-3111（大代表）

トッパン・ムーア株式会社
取締役社長　宮澤次郎（42回）
東京都千代田区神田駿河台1－6
TEL（295）2411（大代表）

各期便り

四三回

東京四三会を久しぶりに去る九月二十八日夕刻市谷会館で開催した。関東在住者は現在二十二名であるが、十三名が出席、静岡からも四名参加されて総勢十七名となり盛会であった。

水戸の圷晴行君、茅ヶ崎の豊島英夫君は御遠方のため欠席、芹沢正憲、田崎茂夫の二君は所用のため欠席された。

小河直人、清水正照、松下篤三望月孟夫、山家清の諸兄は御療養中で残念乍ら御欠席であったが、一日も早い御快癒を祈る次第である。

会場の市谷会館のロビーには、静岡の近藤伊佐男君、小杉一君が真っ先に姿を現わし、定刻の五時半には現役の北里良夫、柳沢保雄の両君を除いて、出席予定者全員集ったところで島田富治雄君の音頭で乾盃して宴に入った。

酒盃も廻ぐる中に北里、柳沢の両君も前後して現われ、盃も話題も益々はずんだ。

静岡の新幹事の見原三郎君より本部の報告があり、続いて、静岡で開かれる月例二十日会の三笑亭の例会や五月八日熱海で開催された第八十五回総会の報告があり、今後の例会への出席の勧誘があった。両会合共、差当たり各々百回を当面の目標とする由の発言があった。

卒業以来五十有余年ともなれば酒盃のやりとりも静かで、お互いに適量を汲みかわして、最後に今井志郎君のタクトで岳南健児を斉唱して再会を約して閉会した。

当日の出席者は次の通りであった。（到着順）

近藤伊佐男、小杉一、三好由三郎、井沢源次、池谷三郎、西沢純三、見原三郎、長戸寛美、吉江誠一、今井志郎、三宅静雄、島田富治雄、宮崎昭、山村忠雄、倉沢栄吉、北里良夫、柳沢保雄

（西沢純三）

五二回

卒業50周年を迎えて

59年度の52期関東クラス会を12月初旬に開催しようということになり、招集を準備している過程でふと昨年のクラス会を思い出した。

15～6人も集まってくれれば上々と踏んでいた幹事の予想を遥かに上廻り、23名という出席があり、会場が狭過ぎたかと嬉しい悲鳴をあげたものだ。

当然会は非常な活況を見せ、久濶を叙す者、近況を語り合う者、献酬を重ねる毎に熱気は昂まり、宴はいつ果てるとも知れぬ盛り上りを見せていた。

こんな折、突然静岡の代表から緊急動議が行われたのである。

私たち52期は昭和12年の卒業であるから、昭和62年を迎えて丁度卒業50年ということになる。一口に50年というが、考えてみれば50年はなんとも長い年月だ。太平洋戦争を含む激動の半世紀を、青春を棒に振ってまで大義に生きてきたわれわれは、いわば人生のつわ者たちだ。戦場に散った仲間がいる。折角戦争を生き抜いたのに病魔に倒れた友もいる。その仲間たちの思いもこめて、今日まで生き残ったわれわれの僥倖を祝おうではないか。高らかに生の讃歌を歌おうではないか。昭和62年は正にその時である。在京・在静合同で満50年を盛大に祝賀しよう。

いつしか会は50周年拡大クラス会開催の話題に集中していった。

ここまではいい。当然ながらことはすんなり決まるかに見えた。だが、一寸待ってくれ、と、ここで思わぬ横槍が入った。

理由は簡単、62年開催では遅過ぎるというのである。62年までにはまだ4年もある。この4年の間に誰かに何かが起らないという保証がどこにある。現在出席の全員が揃って出席してこそ祝賀の意味があるのだ。唯一人でも欠けたのでは意味がない。祝賀クラス会は少しでも全員参加の可能性が高いもっと早い時期にすべきだ、というのがその主張である。

まことに尤も至極、反論の余地のない提言である。そして同時にまた、なんと可笑しくも悲しい発言であろう。一瞬胸をつかれる思いに駆られたのは私一人ではなかったろう。

ほんの僅かの間の沈黙は、やがて「そうだ」「そのとおり」と次ぎ次ぎにあがる声に破られた。

確かに50周年は正確には62年だが、繰り上げ開催をしていけない理由はどこにもない。まして誰もが納得し得る大義と名分がある以上は、だ。

ではいつ…？　繰上げの時期については間をとって60年度とあっさりけりがついた。

決定。昭和60年某月某日某所に於て、52期卒業50周年記念祝賀クラス会を開催する。

いま静岡に於て、東京に於て、右決定に基く慎重かつ雄大な計画と準備が着々進行中である。

（広川　聡）

五三回

五三期関東同窓会は、昨年に引き続き、奥野・月見里両君のお世話で、十月十二日場所も同じ平河町のフランス料理店ビストロ　ラ・ポストで開催された。

出席者は、奥野・小野・香林・三枝・島田・白鳥・園田・谷・徳永・橋本・益田・森下・月見里・山菅の十四名。昨年に比べ出席者が少なかったとは言え、新たな出席者もあり、何れ劣らぬ強者揃いのこと、ワインを飲み干し、水割りの量の進むにつれて、紅顔の美少年時代にかえり、それぞれの想い出話に花が咲いた。

静岡市の街並みの変革は、遂には竜爪山の登山道に及び、健康問題では、最新の医療技術から丸山ワクチンまで、三枝先生を中心に広範囲に亘り侃々諤々、しかし、

何れも還暦すぎのこととてゴルフでの筋肉痛に対する良薬が全員の関心を最も集めた様である。市販されていないとのこと、今頃は三枝先生もゴルフ愛好家の諸兄に悩まされているのではなかろうか。

奥野君より静高校舎の改築が話題に上ると、野球部・サッカー部等嘗っての名選手より、グラウンドの狭さ故の苦労話が出、果ては旧制静高跡地がよいとか、母校を思う心情あふれるものがあった。

明年の同窓会総会後の同期会開催を約し、来る十一月の静岡市に於ける同期会での再会を楽しみに名残を惜しみながらの閉会となった。

（山菅章雄）

五五回

恩師　松永先生

早いもので、恩師松永先生が亡くなられてから、もう七年になる。

先生は、かつて、私に、「教師より頭のいい生徒はいくらでもいる。教師は決して生徒を軽く見てはいけない。卒業して十年もすれば、教師と生徒の社会的地位は逆転しているかも知れない」といわれたことがある。

先生は常に生徒を一人前の人間として扱い、われわれに徒然草を教えるときも岩波文庫の教科書版を用いた。教科書版は余白が広いだけで内容は普通の岩波文庫と全く同じである。したがって「よろづにいみじくとも、色好まざらんおのこは、いとさうざうしく、玉の杯の底なき心地ぞすべき」というような文章もそのまま載っていた。もっとも、そういうところにくると、先生は「次は、とばします」といって、さらりと通り抜けた。

先生は、国漢担当でありながら英仏独の三か国語に通じていた。いつだったか、内藤秀雄、武井富夫の両君とともに先生をお訪ねして「どうしたらそうなれるんでしょうか」ときいたことがある。そのとき先生は、「まず英語をマスターし、続いてフランス語、ドイツ語と入っていけばそう難しいことではない」といわれた。その後内藤は、大阪外語のドイツ語科に進み、ゲーテの作品などを原語で読んでいた。武井は、アテネフランスに通って、フランス語を勉強した。しかるに、小生は、未だに英語さえ怪しいものである。

先生のお宅にはロシヤ語の本もあり、「ロシヤ語は英語と同じアルファベットでその発音が英語と全く違うものがあるから厄介だ」といっておられたから、ロシヤ語もわかっていたのかも知れない。

先生は、太平洋戦争が始まったときから「この戦争は勝てるはずがない」といっておられたが、ずっと前から外国の雑誌や本を読んでいた先生にはそう考えるだけの十分な根拠があったのだと思う。

学徒出陣で出発する内藤を見送る先生には、これからの日本がどうなるかわかっておられたから、定めしその将来が心配だったろうが、どうしようもなかった。

先生は旧姓を中野といい、井宮町の旧家松永家の養子となった。そのお宅は戦後の区画整理で大分小さくなったが、以前は地方の素封家たるにふさわしいいわゆるお屋敷であった。

先生が受ける給料はどういうわけか他の先生に比べるとかなり高給であったが、それでも先生が支払う本代はその給料を上回るという話をきいたことがある。しかしこの話は先生に確かめたわけではないから、真偽のほどはわからない。

先生のお宅は戦災で焼失したが戦後も、リャカー一台分の大英百科事典の旧版（旧版は現在のものと違って当時の論文集のようなもので、大変参考になるのだそうである）を買ったり、戦後出版される岩波文庫は再版を含めて全部届けるように吉見書店に命じたりしておられた。やがて外国語の書物も手に入るようになり、われわれはお宅にうかがって、外国の雑誌などをいろいろと見せていただいたものである。戦後は中国の雑誌なども北京から直接入手されていた。

先生は大変な読書家であり、その知識は頗る広い範囲に亘っていたから、こちらから質問すれば、いくらでも教えてもらうことができた。しかし、そのためには質問する側にもある程度の知識教養を必要とした。もしわれわれがもっともっと勉強していたら、われわれが得た知識は更に広く深いものになっていたのではあるまいか。われわれは、先生のご存知のことのうちのごく僅かな部分に触れただけではなかったか。

小生は、戦後もずっと静岡へ行くことがあるたびにお宅へうかがってお話を聞くのを楽しみにしていたが、先生は昭和五十二年に亡くなられた。ご葬儀が行われたのは二月の二十六日であったが、その日は先生のお人柄のように穏やかな暖かい日であった。今になってみれば、もっともっとおうかがいしてお話を聞いておけばよかったと残念でならない。

（相川富士雄）

五九回

卒業四十周年記念同期会

十年前の三十周年記念会と同じ想い出の場所、静岡浮月楼で去る十一月十日に四十周年記念同期会が行われた。世話人は高野、大橋、原君他静岡在住が十一名と、関東及び関西から夫々奥沢と海賀君が担当した。なお今回は記念誌の編集を企画するために、細矢君以下四名が委員会を構成して、当時の記録、写真、文集等幅広く全員に協力を呼びかけることにした。

同期会に先立ち恒例により同期の物故者三十五名の法要が午後三時より一時間福泉寺穴山導師同期生によっておごそかに行われた。

次いで五時半より懇親会が浮月楼で恩師三上、諏訪、里見（旧姓藤岡）、北川先生を迎え、更に六八名の同期出席者で盛大に開催された。先ず記念写真を撮った後、橋爪君の司会で藤岡先生がご挨拶をかねて乾杯の音頭をとられた。

先生は終戦直後に広島におられ原爆に遭遇されたが、幸い屋内におられ難を逃れた由、現在頭がうすいのは、それとは関係がないよ

うである。三上先生は相変らず背筋がピンとしていて、元軍人将校だったことが思い出された。また諏訪先生は現在木宮君が理事長である常葉学園大学学長として活躍されている。北川先生も吾々には最も親しまれた先生の一人であって、是非間東同期会にも声をかけてほしいとのことである。

次いで原君の指名により全員次々と自己紹介となった。久し振りの出席者はたっぷりと自己PRをやれば、成績が一番?で卒業した○○です。終り！　と満場爆笑、知る人ぞ知るである。

運動部に席をおいた連中は矢張り全員の注目する処で、当時如何に吾々が文武両道の意気に励んでいたかが伺われる。関東、関西両支部からは、幹事である私と海賀君から状況の報告を紹介する等、支那事変、大東亜戦争、更には静岡の大火を経験した当時の静中時代に全員が想いにふけったことでしょう。

最後に高野君より会計についての説明があった後で、緊急動議があり、一番最後迄生きながらえた人に記念品を贈呈しようとユニークな提案がなされ全員拍手で賛同した。

最後は海賀、森の両君が舞台に立って手さばきよく校歌、応援歌を合唱し散会した。（奥沢　徹）

六一回

随筆・「そば」談義

ラーメン、スパゲッティ、うどん、そーめんなど麺類は好きであるが、特に「そば」は大好物である。昼食によく食べ、又旨いそばを求めて東京中を歩き、そして旅先で賞味した。そんなことから得た蘊蓄の一部をとりまとめたのが以下の「そば談議」である。

札幌大通り地下街に荻窪「本むら庵」の支店がある。室蘭に勤務していた時よく食べに行ったが、その入口に舌代が掲示されている。即ち「当店では最近珍しくなった北海道産の玄そばを石臼で挽いたそば粉も使用いたしています。つなぎも少なめ、水ごね、手打ち云々」と認められているが、この文章の中にそばについての諸問題があるようだ。

一、原料について

そば粉は玄そばを粉化したものであるが、その玄そばの供給は国内が少なく大半を輸入に依存している。即ち、需要が年間八、九万屯あるに対し供給は国内二〇%、輸入八〇%の比率となっている。国内は北海道、青森、九州、茨城などが主産地で、輸入は中国、カナダ、米国、ブラジルと言った所である。価格は輸入物が国産物より四分の一前後と安い。この較差はコストを反映しているが、国産物の高値維持はその品質と嗜好によるようだ。特にブラジル産は年三回収穫の為、価格は安いが品質はいまいちの様で、主として立喰そば、乾麺、そしてそば焼酎用にむけられているとのことである。従って一般のそば屋は輸入物を主としたそば粉又は麺を使用し、専門店は国内産を主に使用している。特に名店は精選された玄そばを産地農協と特約購入し自家製粉している様である。さて問題はそれからである。そば粉を練って麺にするにはちぎれないようにする為につなぎが必要である。つなぎには卵、山芋等を使うこともあるが、大部分は割粉即ち小麦粉を混入する。その混入割合は二〇%が良いと言う。所謂「二八そば」の由来である。もっともこの「二八」の由来については、この「配合論」と江戸中期のそばの値段が二掛八の十六文から来た「価格論」とがあるが、定説は配合論に落ちついている様だ。問題はそば粉より値段の安い小麦粉がつなぎを超え増量材として使用されていることである。所謂水増しである。日経紙によると昭和五六年暮、日本消費者連盟、日本麺類業組合連合会が問題を提起しているが、首都圏製粉会社十六社の「一〇〇%純正そば粉」を分析したら小麦粉が五〇%から一〇%も混入されていた。そこで、純正そば粉はそば粉一〇〇%を厳守方改善を申し入れた。又、町のそば屋で麺を作る際にはつなぎを良くする為に、更に小麦粉を一〇―三〇%追加するのが普通なので客の口に入るのはそば粉の少ない低品位なそばにもなるわけであると言う。従って同連合会は「客に出すそばにはそば粉を最低六五%は含ませる」との通達を出したとのことであるが、その後の経過はどうなっているか。小麦粉の方が多い「逆転そば」ではかなわない。

二、製造について

おいしいそばは「挽きたて、打ちたて、茹でたて」の所謂「三たて」が良いと言う。何でも作りたてが良いが、そばは特に香りと味が微妙であるからであろう。

先づ「挽く」こと。昔は玄そばをそのまま石臼で挽いたが、今は玄そばを脱穀して殻をとる。そしてロール又は石臼による製粉機にかけて製粉する。先ず玄そばの芯部分が粉砕され篩を通して回収される。所謂「一番粉」である。香り、味は少ないがサラッとして白い。次に中層部分が出る。「二番粉」でベースの粉となる。そして表層部分が「三番粉」として回収される。三番粉は黒く、香りが強いが品質はおちるようだ。一般的にはこれらを混合する。なお玄そばの保存特に製粉したそば粉の保存には、温度、湿度等の注意が必要とのことで、この点から「挽きたて」が良いわけである。

次に「打つ」こと。「一鉢、二延し、三包丁」と言はれ、そのうち一番大事なのが「一鉢」で木鉢で手もみすることだと言う。機械ミキサーで水と粉を混合するだけでは練りがないから駄目だと言う。この三工程とも凡て機械でなされているのが一般の「機械打ち」のそばであるが、有名店では凡てを手作業で行う。所謂「手打そば」である。但し、名店でも蕎、更科、砂場等では処理量が多いこともあり、重要な練りは手もみで行うがのしと切ることは機械で行う。「機械切り」である。

そして「茹でる」こと。茹で方、洗い方、水の切り具合もコツがあり、味にはかかせない要因である。

三、つゆ、薬味、種物

つゆには蔽系、更科系の辛口、甘口があるようで、醤油、みりん、かつを節、砂糖の配合が微妙と言う。又、薬味はねぎ、辛味大根おろし、わさび、七味、のりを使う。

以上で出来上り。そばの基本型である。生そば、並そば、もり、そして器から言うのか、ざる、せいろなどと言はれる。元禄期頃から手軽さからかつゆをぶっかけた所謂「ぶっかけそば」ちぢめて「かけそば」が出て来た。そして江戸末期からそれに種物をのせる様になった。種としては車海老の天ぷら、合がも、とろろ、にしん、玉子が良いと言う。

四、旨さ、栄養

そばの旨いのは香り、滋味、風味、舌ざわり、のど越し感、歯ざわり等と言う。中々香りを感ずるものにはお目にかかれないが、歯ごたえ、そして噛んでいるうちに出て来る甘味、滋味はそばならではである。更に、そばには良質なでんぷんのほか、良質なたんぱく、ビタミンB、ルチン、コリンがあり栄養価は高いという。但し、そばのたんぱく質は水溶性が高いのでそば湯を飲むことをお忘れなくとのことである。

以上、おそばを食べる時の話の種に。

（安原徹治）

六四回

今年も黄金色の小さな花が甘い香りを一杯、伊豆大仁カントリークラブに漂わせる頃となった。

六四期の有志十二名と六一期の大石沢男先輩、それに名波君の息子仁人君、小生の息子誠司、娘喜久子が参加して、第四回ゴルフコンペを開催した。時あたかも十月十日、体育の日で薄曇り、少々肌寒かったが、熱年の熱気で寒さを吹き飛ばした。

静岡より、秋山義明、井上公司、倉田徹、石原良昭、浅井幹夫君が出席され、倉田君のドライバーショットの飛距離に目をみはり、秋山君のオール、アイアンの安定性に驚き、ベストグロスを井上君と静岡勢が健斗した。

ゴルフ開始二年目で、日頃の理論と、猛練習と、最新鋭のクラブがものをいって優勝の栄誉は渡辺素夫君が4アンダーで獲得した。期待された望月坦君、永田進君、岩本吉雄君は振わず、年に二、三回クラブを握る村上君がニャピンを二個も取った事は立派とおもう。

順が逆になったが、七月六日（金曜日）新橋・新橋亭に於て本年の同期会を催した。昨年迄四〇〇〇円の会費で、ずっと我慢して来たが、物価上昇に勝てず遂に五〇〇〇円に値上げしていただいた。場所を東京駅近くに移したためか、出席者も増加して三〇名の多きを数えた。参院議員の藤田君、いつも陰で協力してくれる渡辺靖君、同期生の大久保富太郎、大石哲三君を番頭に招いている山下啓也君、六九期の神谷貞子、松島玲子女史、静岡の大原規男君の顔も見えた。

名司会者の渡辺素夫君の進行で宴が始まり、本年は私の健康法というテーマで各々が健康法を披露した。

増田誠男君（東京書籍取締役）血圧など気にしていたら仕事が出来ない、ケセラセラで毎日処理している猛烈派。昨年喉頭ガンの手術で目下声が出ないが、元気になられた原田三津男君。来年はうんと熱弁をふるって毎日新聞社を定年になる加藤秀夫君は、フルート演奏が一番ストレス解消であり、退職後に備えて針灸術をマスターされたとか。第一勧業銀行支店長から日本共栄の取締役に就任した松下一男君はNKHのテレビ体操の常習者だが、局の都合で一時中止となり、局に投書したら全国各地より同様の趣旨の不満の投書が多数あり、又復活することになって毎日体操をして健康を保持している。我等は六四、六五と二回卒業したのに驚くなかれ、六三、六四、六五と三回の同期生をもつ小林剛君。ダイヤモンドクレジット横浜支店、久しぶりの出席松村肇君。

その他、増田政雄、神谷武男、塚本光博、時田勝博、中村孝、仲野実、吉井駿亮、長島健、杉本哲、竹内豊、山本光夫、八木綱三、村上喜代二、浅井幹夫、岩本吉雄、名波倉四郎、秋山義明の諸兄より愉快な話が、次から次へとあり、閉店時間過ぎまで歓談した。

本年の同期会で、幹事に渡辺素夫君を推薦し、同意を得ました。同君が以後の会報を担当されますので、同期の情報をより良く御知らせ出来ると存じます。

＜付記＞

幹事長の名波倉四郎君が本年の関東弁護士連合会の理事会で、理事長代行に選任され、十月十三日鬼怒川温泉でのシンポジウムで活躍されました。

（野沢正憲）

六六回

第66期関東地区同期会

23人参加し、11月2日開く

首都圏在住の第六十六期（昭和二十五年卒業）同期会が、今年も例年通り十一月の第一金曜日、二日夜、東京・新橋鳥森の「大洋」で行われた。同期会参加者がここ数年いまひとつの感があった。今年は田中俊男幹事が、電話で各個人に当たって出欠席を求める〝電話攻勢〟をとったご苦労が実り、二十三人もの出席を得、大洋の二部屋を利用するという盛大なものとなった。

会は、しばらく体調をくずしていた小島清司氏が健康を回復したのを祝し、同氏に乾杯の音頭をとってもらい、始まった。

全員が五十代の半ばにかかろうとしている。それぞれの勤務先で重鎮として活躍している人がいる一方、系列会社へ幹部として出向

き新しい職場で活躍している人も何人かいた。

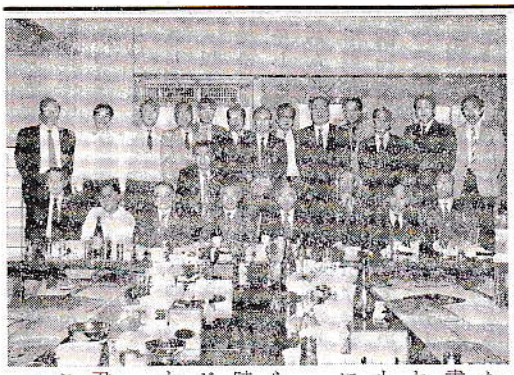
「最近ここに移って」とか「仕事の内容は」といった話を交わしながら、新しい社名と肩書を刷り込んだ名刺の交換が盛んだった。

約三時間、酒、ビール、いま流行の焼酎のお湯割りをたっぷりくみ交わし、高校時代の気持ちに戻って歓談した。

最後に河守輝雄氏のリードで全員が肩を組み、校歌を高らかに歌い、来年の再会を楽しみに散会した。

なお、開会に先立ち田中幹事から、さる四月、海野裕男氏が狭心症で死去、同期会名で弔電を打ったこと、また同期生で他界した者が十五人いることが報告され、互いに健康に十分注意しようといましめ合った。

（石川創二）



六七回

何となくふと考え浮べていた岩崎為明君の姿を、薄くらがりの中に認めた時、思わずわが眼を疑いかけた。これが予感というものだろうか。

十月某日午後九時、静岡駅前のタクシー乗場。

「帰るのか？」「その顔を見たらまっすぐ帰るわけにはいくまいよ」―あとは例の如くで、「今から帰る」とかけたばかりの家への電話もそこそこに梶原由三君を呼び出す。岩崎君を思い浮かべていたのは、梶原君に「関東の会報へ書け」とむづかしい注文をつけられたのが原因。とあればどうしても楠原君を引っ張り出さないわけにはいかないわけである。

さて、それはともかく、静岡から関東の総会へ出席させてもらう時の楽しみが幾つかある。総会はじまっての十年間にいつしか生まれたものである。

まず、岩崎君はじめ、児島英男君や遠藤一彦君などと顔を合わすこと。四人の共通点は同じテニスコートでタマ拾いをしたこと。体力にあまり自信がなく練習もほどほどだった私と違い岩崎君のテニスはパワフル、遠藤君は舞のような動きだったと記憶する。一番頭角をあらわしたのは大学まで続けた児島君ということになろうか。四人で一度手合せしようという計画はまだ実現していないので、現在の腕のほどはわからないが、舌戦の火花だけは会うごとに激しさを増している。腕や足腰の衰えをよそに、口だけは相変わらず達者なためだろう。

酒のサカナとして一番面白いのは、仮校舎から城内へと、砂利道をローラーを押したり引っ張ったりして移動した引っ越しの時、そこに遠藤君が「いた」「いない」で始まる遠藤×岩崎の激しいラリーの応酬。ジャッジ役の私がその時の気分であっちに味方したり、こっちの肩を持ったりだからこの勝負果てしがない。しかも顔ぶれが揃ってこの話が出ないと何となく物足りなくて、誰かが水を向けるために、他愛もない同じ事がここ何年来、面白おかしく繰り返されている。

先輩にお会い出来るのも関東総会での楽しみである。テニスの方では、清水汪、柴田克明、田中俊男氏ら。今年は菅原磐氏（66期）にお会いできた。在学当時以来三十何年ぶりだったが先輩が忘れずに声をかけて下さった。その他同業の方でも先輩格の上杉重吉氏。いろいろと教えを受けることが多い。

そして、私事での楽しみだが、親子で出席できること。ようやく社会人となった二人の子供のうち次男は東京から名古屋へ転勤となったため、三人同席は当分お預けとなってしまったが、長男は関東の仲間に入れていただけた。多勢の中で、家とはまた違う親の姿、子の姿とともに眺めあうことのできる仕合せをかみしめている。これも静中・静高関東同窓会ならではのことと有難さで一杯である。

○

さて、今年は静中・静高同窓の一員としての私にとって、多勢の方々の好意に恵まれた忘れ難い年となりそうです。

一つは関東同窓会の十周年を記念しての席上一段高い所に立たせて頂いたこと。故桜井昌一郎君やその他の諸兄はともかくとして、微力な私まで、と面映ゆい限りです。関東の皆様のご好意本当に有難うございました。

もう一つは、恩師本告亮一先生の歌集刊行を実現できたこと。これも同窓会の諸先輩方のご協力なくしては成し得ないことでしたが全面的なご賛同を頂き、高齢の先生にお喜びいただくことができました。中でも関東の皆様方のお力添えにおうところ大でした。総会場でも数人の方が「モトキッちゃんの本を買わなくては」と声を掛けて下さいました。先生のお人柄もさることながら、先輩方の情の厚さに感謝の念禁じ得ませんでした。

色々お世話戴き、そのうえ表彰までなさって下さり、その御礼をと思いましたが、筆が他の方へ走ってしまい、意を尽くさぬ結果となってしまった様ですがお許し下さい。会長はじめ皆様方にただただ厚く御礼申し上げます。

静岡から関東を観た時、団結の強さとあふれる活気をうらやましく思う時があります。高齢の大先輩から、大学在学中の若い人たちまで厚い層の人たちが、同窓という共通点を中心に一堂に集まる素晴しさ。今後のますますの発展をお祈り申し上げます。

（光木　徹・静岡在住）

六八回

静高OB
〃夢のラインアップ〃

静高を出てから三十二年余。せっせと通いつめているのが神宮球場と後楽園球場である。お目当ては六大学野球とプロ野球、それから都市対抗は毎年欠かさず見るほどで、社会人野球にもかなり入れあげている。大学は早稲田なので六大学リーグは一シーズン五、六試合、早稲田がらみのゲームを見ている。

プロ・アマ合わせて年間五十試合は観戦しているので、高校卒業後ざっと一五〇〇試合をナマで見ている勘定になる。テレビ中継はシーズン中ほとんど毎晩欠かさず観戦。われながらあきれるほどの野球中毒症状である。

そこで、野球試合を数だけはたくさん見ていることに免じていただいて、戦後静高OB選手の〝夢のラインアップ〟を組ませていただくことにする。ご異論は多々あろうが、座興と思っておゆるしいただきたい。

ここでの評価基準は、静高の現役当時の活躍ぶりではなく、あくまで卒業後の中央球界で示した実績とする。ポジションは必ずしも高校時代のものではなく、むしろ卒業後定着した守備位置とした。

AからCまでランク付けして、夢のオーダーを組んでみると――

（A）

一、(中)服部　二、(遊)石山
三、(右)植松　四、(一)小田
五、(左)望月充　六、(捕)種茂
七、(三)永嶋　八、(投)大橋
九、(二)宗野徳

服部は日楽から近鉄―日本ハムで活躍した俊足好打の外野手。石山は早大に進み日本石油当時は社会人ベストナインに選ばれた。早大監督としても腕をふるいプリンスホテル入り。植松は法大で巧打をみせ阪神入りしたが、プロの世界では力不足だった。

小田は早大全盛期の四番を打ちヤクルト―日ハム―南海―近鉄で主軸を打ったロングヒッター。望月充は立大―大昭和から阪神―南海で長打をとばす。種茂は立大から丸善石油。東映―阪急でマスクをかぶり、強気のリードで知られた。現在日ハムの二軍監督。永嶋は48年全国準優勝のときのサード。慶大で主将をつとめ日産自動車入り。宗野徳太郎は立大で長島茂雄の育ての親といわれ、全藤倉入りし都市対抗で活躍。

投手に大橋を推すのは、早大当時エースとして力投した実績を買うからだ。重い球で相手打者をつまらせたピッチングは、やはり静高OBの投手では第一級である。

（B）

一、(三)佐藤昭　二、(中)篠宮
三、(左)近藤晴　四、(右)佐藤竹
五、(一)赤池　六、(捕)長倉
七、(二)丸山　八、(投)大久保
九、(遊)鈴木久

佐藤昭は金指造船から電電信越で活躍した短駆の三塁手。鈴木久弥は早大―大昭和で小味のきいた守備を見せた。篠宮は中大当時東都リーグで首位打者となる。近藤晴彦は早大で好打をみせたが、大洋では不振だった。赤池は立大の黄金時代にベストナインに選ばれ国鉄入り。佐藤竹秀は近鉄で鳴らした強打者。丸山は亜大―日軽で適時打を放った。長倉は早大で主将、大昭和で監督をつとめた好捕手。大久保は昨年度の甲子園出場投手。南海入りし将来を期待されている。

（C）

一、(遊)吉田　二、(二)神谷
三、(右)鈴木康　四、(一)浦部
五、(中)植野　六、(捕)松村
七、(左)白鳥　八、(三)大塚恭
九、(投)石田

吉田は明大で好守を見せた小柄の遊撃手。神谷は中大―金指造船で活躍。小型の割りに長打力があった。鈴木康生は現在の早大主将。静高当時は捕手だった。浦部は立大―大昭和のスラッガー。植野は大洋に在籍。松村は専大―新日鉄室蘭で攻守に冴えをみせた好捕手。白鳥は48年全国準優勝当時の長距離打者で早大から日産自動車入り。大塚恭弘は三塁手兄弟の弟で立大からトヨタ。石田は35年全国準優勝のときのエースで早大―大昭和。

そのほか中央球界で名を馳せた選手はつぎのとおり。

＜投手＞前田（立大―三菱造船）、山田（鷺宮製作所）、秋本（亜大）、遠藤（早大）、太田（明大）
＜捕手＞松永（日楽）、渡辺尚（立大―金指造船）、大野（鷺宮）、市川（立大）、安間（中大―河合楽器）宮城（中大）
＜一塁＞横山弘（石川島重工）、塩沢（専大―日楽）、花村（ティアック）
＜二塁＞森山（立川AIO）、稲葉（早大）、石川（慶大）、横山靖（早大―河合）
＜三塁＞山本（法大）、渡辺晃（立大）
＜遊撃＞高橋秀（早大）
＜外野＞石原（慶大―東圧砂川）、中野（北海道炭鉱）、佐野（日石）、寺田（日軽）

※二塁の森山は、戦後初めて甲子園に出場したときのエース。都市対抗では二塁手として活躍した。

（鈴木俊彦）

七〇回

入学は城内、卒業は静高

「不作の70期」といわれたらしい。誰がいいだしたのか知らないが、案外、我々70期生が自嘲した言葉というのが真相だろう。

東大に現役入学した人数が少なく、野球もパットしなかったことが、このレッテルを貼られた原因らしい。

野球については、一年生のとき、県大会決勝戦で敗れたが、山静大会で勝ったので、甲子園へ駒を進めることができた。

しかし、二年生のときは予選大会二回戦で負け、三年生のときはナント一回戦で敗退したので、呆然となってしまった。

だから、進学率に影響したのか因果関係は定かでないが、少なくとも私にとっては、今もってボー然とした儘という有様である。

昭和26年4月、静岡県知事選を小林武治知事と、新人の斉藤寿夫氏とが争う中、駿府城の門をくぐり、静岡城内高校に入学した。

兵舎を利用したオンボロ校舎に落胆するどころか、伝統校にふさわしいとさえ思った。

やがて、このオンボロ教室も捨てたものではないわいと、ほくそ笑むようになった。ホームルームの掃除のとき、ゴミを外へ捨てにいかなくても、床のあちこちにできている破れ目とか、穴をふさいだ板をはがして縁の下に落せば、簡単に済んだからである。

学園生活にも馴れてきた頃、自治会より全校生に、アンケート紙の配布があった。

サンフランシスコ講和条約について、単独講和、全面講和のいずれを支持するか、という内容である。

ヘェー、高校生というのは、こんな難しいことを考えているのかと感心したが、この問いについては、正直なところ、サッパリわからなかった。

高校入試の統一アチーブメントテストは、当時やさしい内容であった。社会科の時事問題では、フィリピンの大統領はキリノ、というようなことを知っていれば充分だった。だから、講和条約の結び方についても、高校生は自分の意見をもつものかと、ビックリしてしまった。

俺も早く大人にならなければいけないナと、このことが契機となって、岩波新書やら、三木清の本などを読み、眉間に皺を寄せて、深刻そうなポーズをしたり、タイヘンなものだったが、大人としての高校生になりたい、というあせりが動機だから、このときの乱読は上すべりしたらしく、血肉化しなかった。

今日、通年制ホームルームの良さを、同期生の多くが語っている。このような人の何人かは、上級生と今もって親交を結んでいるようだ。

ところが私の場合は、このホームルームの上級生に、にらまれてしまったのである。自分では全然気がついていなかった。

ある日、三年生のMさんに、チョット来い、とコッペパン売りで繁昌の購買部の裏手に呼び出された。

お前を三年生が殴る相談をしているから気をつけろ、という。

身におぼえのない私には、まさに青天の霹靂であった。

いま、俺に殴られたことにするから、ホッペタを押さえながらホームルームへ戻れ、とのMさんの指示どおりのしぐさをして事なきを得た。

今もってよくわからない出来事であった。

卒業生を送る会が全校で開かれたとき、「上海帰りのリル」の唄にことよせて、「どこへ行ったかキーンさん、誰か金さんを知らないか」と自然発生的に大合唱になった。諸先生の別れの挨拶が続いたが、とうとう金平先生が現れなかったからである。（このニックネームを、この時期以外の人達に説明することは無意味なことであろう）

この金平さんも、間もなく学校を去ることになり、全校生を前に壇上より怒りの気持をこめて最後の挨拶をされた。

このことは書いてはいけないことかも知れない。

しかし、高校生活をふり返るとき、一番変った出来事として、記憶の底から浮かびあがってくるのである。

既に30余年の歳月が経った。児戯的悪意も風化していよう。

いつの朝礼であったか、記憶もあいまいだが、ところは城内の校庭だったと思う。そこで、長谷の方へ学校が移転していくことがタイムテーブルにのってきたので、校名をどうするか、このまま城内高とするか、それとも変えた方がよいか、変えるとするなら、どんな名称が良いか、と校長より諮問があった。

しばらくは、ガヤガヤと生徒の間での私語が許された。

列の後方にいた私のまわりでは「こういうことは城北高の女学生にも相談すべきだ。城内があっての城北だから、我々が勝手に校名を変えたら困る筈だ」と誠に気配りのいきとどいた案が出て、ソウダソウダと同調者も多かったが、壇上の福山富雄校長まで届く声にならず、大勢は「静岡高校」となっていった。

この場での生徒の意向が、校名を最終決定したのではもちろんなかろう。

「封建的」「民主的」の言葉の盛んに喧炙された時代の、手続きの一つであったようだ。

二年生となったとき、三年生と二年生は長谷の新校舎へ移ったが全教室がまだ完成してなかったので、新入生は城内校舎への登校であった。

この不規則な分散授業のせいか通年制が廃止されて、学年制のクラス編成となった。

さすがに二年生となると、坊主頭は運動部員ぐらいとなってしまった。

城内校舎も長谷校舎も、下駄履きでの登校は禁止されていた。

しかし、校庭を下駄で歩くぶんには、何らのとがめもなかった。

校舎内を下駄で歩かれると、音がうるさい、というのが禁止の理由だったからである。

冬はともかく、それ以外はよく下駄履き登校したものだが、高校生の下駄は、まだカッコイイ時代でもあった。

下駄で登校したときは、もちろん授業中は裸足のままである。なぜか上履きのようなものは、カッコワルイものだったのだ。

授業中はおとなしい存在だったが、何か行事があるときは、ハリキッタ。

野球の応援、袖師での五日間の水泳訓練、卯高祭などはマジメに一生懸命やった。

特に、三年の秋は、創立75周年記念の卯高祭だからハリキッタ。

教室で徹夜して準備にはげんだので、担任教師より、授業以外のこととなると頑張るナー、とおほめ?にあずかったこともある。

運動会では、競技の合間にとび入りで変なプラカードを持って運動場をまわったり、クラスの立看板の後にバケツを置いて、城北、英和、双葉などから、我がクラスを応援に来られた女学生のトイレはココです、と大書した貼紙をしたり、本当に一生懸命でした。

昭和29年3月卒業。昭和59年現在で30周年を迎えた70期諸兄のご健康とご多幸を切に祈るものである。

（T・O生）

（注）

70期富田三樹君こと三木卓君はこのたび第22回野間児童文芸賞を受賞いたしました。

心からお祝い申しあげます。

七一回

K・S君、一別以来十五年か？五度目の年男も残りわずか、五十路も目の前だね。

ところで君もやっとゴルフを始めたとか、結構々々、なに気にすることはない、四十だって五十だって手習いはやった方が良い。ゴルフといえば我が栄光の同期会コンペをご存知と思う。あの百年祭をきっかけに春秋二回、この秋で十二回を数える。相集う仲間も毎回二十人をこえ盛況の一途だ。

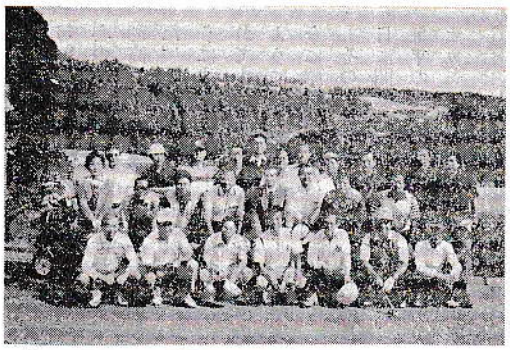
十月十四日、三島ゴルフコース、快晴、熱からず寒からず、地元静岡勢は常連の八木豊則、大関博司、矢沢久美、小泉幸二、松永良夫、太田良時宏、大村五朗、良知克彦、鈴木崇生、鈴木隆義、加藤隆康、木鈴啓男、木下雅夫、石原鉄也、菊池英雄の諸君、それに箱根を越えた東からは矢部正和、岡田宏、曽根幸一、望月裕言、渡辺弘、徳田武司、山田卓、三上裕一、そして名古屋から浦田と二十四人、それになんと皆の顔だけみたいと駆けつけた谷口滋君（千葉で外科を開業）の30年ぶり再会のハプニングもあって、にぎやかにスタートした。それに毎回花をそえてくれる紅一点の後藤弘枝さんが今回もカメラ片手に同行取材。（なぜかけっしてクラブを手にしないのだが、その謎は？　ハンディはシングルではないかとの説もある）

さて紅葉しはじめた木立ちに目を遊ばせながら、耳では伊豆の山々にこだまする天下の大声松永君の歓声を楽しみながら、うまい奴はCHMPを目指し、へたな奴はそれなりに楽しみながらのラウンドだった。しかしその中で少々気の毒だったのは菊池英雄君。スタート後、パー、パーときて調子にのりかかった三ホール目、快心のドライバーショットの直後、右足ふくらはぎに強烈なショックと痛みが走って歩行不能、そのまま痛恨のリタイヤ。クラブのソファーで横になりながら、アキレス健が切れたか肉ばなれかと痛む足をさすっていたが（さすってくれたのは後藤女史であった、との説があり、同情票が減った）菊池君にとって幸いだったのはメンバーの中に磐田で整形外科を開業する鈴木暉男君がいたこと。地獄で仏とはこのこと、同先生の見立ては「三頭筋の部分断裂」要するに大したことはなく、中年後期が証明されただけということで一安心。持つべきものは同期生と一同確認し合った次第。

さて、それでは優勝はといえば、会の主旨からいってどうでも良いともいえるが、このコンペ優勝者が手にする恩師のひとり大村正夫先生作なる能舞ブロンズ像のためにその名を記すと鈴木崇生君。このブロンズ像は高さ五十センチの堂々たる芸術品、まずプロをふくめてこれほど素晴しいトロフィーをめぐって争われるコンペはないだろうと自慢の種にしているものだ。実をいうとき小生も十回目に幸いにもこれを手にすることができ、我がうさぎ小屋の玄関に飾ったものだが、値のつけられない芸術だけに気を使うこと、早く誰れかに渡したくなった。重さも6KGあって、優勝者のハンディはその重さに比例して軽くなるしかけだから、当然、君にもチャンスがあるわけだ。

こうして、ラウンド後、楽しい語らいにひとときを過したあと、釣瓶おとしの夕日をあびながら散会、来春の再会を約したというわけだ。

何んの気がねもないなつかしい仲間だけのコンペ。君もだんだんその気になってきたのではないだろうか。ぜひ次回には一緒に参加しよう。それまでの研鑽を祈る。君がやっと仲間入りをしそうだという情報はさっそく同期のマドンナにして同期会の永世幹事たる後藤さんに伝えておく。女史からもお誘いがあるはずだ。もちろん断わることなんてないよな。来春は卒業三十年記念大会になるそうだ。再会を楽しみに。（浦田彰）



話題のスペース
（明治通りと大久保通りの交叉点）
レストラン・モア
小人数から30名様くらいまでクラス会等に最適です
土屋晃康（67回陸上）
TEL　03—208—2931・204—1251
東京都新宿区大久保2—1—3

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック
熱函病院（ねつかん）
院長　小坂　博（67回）
住所　熱海市春日町12—2
TEL　0557—83—3131

メダカの学校の優等生たち

芹沢正憲（43回）

芹沢の左隣りで腕組みしている出目金タイプの男の子が小川である。彼は歴代静中生としては信じられないようなチンケな経歴の持主である。というのは、元来われらより二年先輩で、当時早稲田高等学院に進学、静中サッカー部で錬磨した特技を生かして入学早々レギュラーに抜擢されたのみならず、矢次早に超高専級のテクニックを買われて、オール早大のメンバーにシードされるという三段跳飛躍の放れ業をやってのけたサッカーエリートであったのだ。その輝しい経歴の持主が、早高を退学して古巣の静中に逆戻りしてわれらと机を並べたのには、次のような笑えぬエピソードがあった。

ことの真相は、当時安倍郡清水町長をしていた小川の厳父が、伜の教育に関して突如コペルニクス的変心とも言えるような心境の大変化をきたしたことに起因する。曰く、大学教育は立身出世のためのみに存在する。この不景気風の吹き荒れる真最中では、なまじ私大を出ても〝角帽ルンペン〟に転落するのが関の山で、無駄な投資である。挑戦するなら、須く一高から東大へのエリートコース一点張り！これ以外立身出世を保証する教育の花道はない。緊褌一番、もう一度静中に逆戻りしていちからやり直してエリートコースに挑戦せよという、まことに身勝手なツルの一声で、受けとめ方では親権乱用ともとれるご託宣。このご託宣は、当節の気狂いじみた教育ママのカラ念仏とは違って、一応の見識であり、スジはご立派であるが、困惑したのは小川自身であった。一時は、前代未聞の人権蹂躙オヤジ！と天を仰いで慟哭しながら、このツルの一声を特技の電撃キックで蹴飛ばそうとしたが、先輩の説得もあり、ついに無念のホゾを噛みながら玉砕したものであった。かくて小川は角帽を丸帽にかえてわれらの仲間入りをしたわけだが、天性の明朗な性格は、大学生経験を生かしてのリーダー的親分肌と相俟って、瞬く間にクラスの人気者にのし上った。その上、芹沢とはお互いにウマが合ったのか、忽ち刎頸の交りを結んだものであった。次に、その頃メルヘン街道上で起きた両人と静高生とのトラブルを、当時両校間にわだかまるバック事情をも交えて、歯にキヌきせずにドキュメンタリイに追跡してみるのも徒爾ではないだろう。

大正末期に、文部省が勘案した直轄高専地方分散配置の構想に基き旧制静高が静岡市に誕生して雄叫び高く産声をあげたのである。それまで県下一のエリート中学として駿府城下を濶歩していた静中生も、時の落差というきびしい現実の前には抵抗するすべもなかった。静高誕生の途端に、哀れにもエリートの座から蹴落されたのであった。変って静高生という新しい世代の主人公が、高下駄で城下街を隅なく蹂みにじったからである。大御所さま以来おっとりした気質の静岡ッ子も、この新しい主人公『肩で風切る静高のツバメ』をむかしからのともがらのように歓迎し、酔っぱらってのコンパやストームにも特別の寛容さを示したりした。『妙なる学舎にわれらは学ぶ』と蛮声をふりまきながらカラコロ曳きずる高下駄、無雑作に引っかけたマント姿に金色夜叉の貫一のイメージを織り交ぜたり、末は博士か大臣かのサノサ節の文句をこの若者たちの未来像として心のネガにしかと焼付けたりで、静高ブームは膨れ上る一方であった。颯爽と目抜き通りを若鮎のように泳ぐ静高生！、片やしょぼたれて小便臭い袋小路をダボハゼのようにさまよう静中生！、も早完全に勝負はあったのである。

その上アタマにきたのは、同じ日に開催された両校の大運動会。毎年の声援が恒例であった市内のオカチメンコたちが、この度は申し合せたように、静中を素通りして静高グランドに潮のようになだれ込んで立錐の余地もないのに反し、ペンペン草の生えた静中グランドは閑古鳥が鳴く始末！、オカチメンコとは言え、もてなくなったことは青春の若人にとって大きなショックであった。

それやこれやで、静中生にとってはアタマにくる要素ばかりで、ついには恨み骨髄に達したとて不思議ではなかったであろう。

両校生のトラブルは、こうしたバック事情の下に勃発したのであった。

その日は安東田圃のおちこちに春風を切る矢車の伴奏がサラサラと流れて、青空に紅白の鯉ノボリが悠々と泳いでいた日であった。芹沢と小川がメルヘン街道の土手に腰かけて駄べっていると、土手下を二人の静高生が例の如く高下駄をカラコロ曳ずり乍ら、〝夢の静岡さ霧であけりゃ、肩で風切る静高のツバメ、乙女心をついいらす〟との歌詞を、これ聞えよがしに高らかに唄いながら通る。因みにこの歌詞は、当時地元の静岡民友が郷土の代表歌と謳って募集した静岡行進曲の当選作で、後に作詞家としてビクター入りをして、多くの名作をものした若杉雄三郎の若き日の傑作である。蛇足を付け加えるなら、不肖芹沢も、その砌り静岡音頭の部に応募して、幸運にも入選した経緯もあり、思えばうたた懐旧の情ひとしほ！とも言うべき歌詞である。さて、その後、肝心のトラブルはどうなったのか。蛇の足はいい加減にちょん切れ！　ごもっとも、ごもっとも。さて、頭にくる悪材料ばかりで腐り切っていた小川が、半ばやけっぱちに〝君ら、もてていいな〟とやんわりと一太刀浴せた。その途端に、お前ら、中学生のくせに生意気だ！と言うセリフが返ってきて、次いで物凄い権幕で喰ってかかってきたのである。

それを契機に、われらは受けて立って、プロレスはだしの乱闘が

始まったわけである。小川の早高からの逆戻り組で、しかもインターカレッヂの精鋭であることも、芹沢の静中六年生の多額納税組で剣道有段者であることもご存知ない彼らにしてみれば、中学生のくせに生意気だと吐くセリフこそ、当初われらを世間並の中学生の小僧ッ子ぐらいにナメ切っていた証拠である。

先手必勝は必ずしもケンカの極意ではなく、ハングリー根性に徹した飽くなきファイトこそ掛け替えのない要素。われらには恨み骨髄の域までに増幅されている憎悪があり、それがファイトを煽る原爆的なエネルギーとなって付加されては、モヤシのようなひ弱な青二才の高校生では、到底われらの敵ではなかった。口ほどもなく散々蹴散らされた上、あえなくノックダウン。這々の態で近くの安東村駐在所に駈け込む醜体ぶり。勝ったな、と意識した途端にオットリ刀の駐在巡査がかけつけてきて芹沢を見て驚き顔で、なんだ坊ちゃんじゃないか！いかんなあケンカは。ケンカはいかんよ、とのたまう。芹沢と駐在巡査はすでに顔見知りだったのか？顔見知りどころか、なにを匿そう、その時、芹沢のオヤジが静岡警察署長だったのであった。当時の署長官舎は警察署の構内にあって、芹沢はつね日頃官舎の隣の武道場で警官相手に特技の剣道練習にいそしんでいたので、二百人ぐらいいた警官の誰彼なく顔見知りの間柄で、オール警官から坊ちゃんと親しまれていたのである。坊ちゃんと呼ばれるほど愛くるしかったかどうかは釈明の限りではない。

駐在さんに小川が辻褄を合せるように、静高生の方から殴りかかってきたもので、こちらは無我夢中で防いだだけと神妙に弁解すると、巡査はそうだろうと頷きながら後からきた静高生に、君らが悪い、弱い中学生いじめはやめなさい！叱り飛ばしてくれた。二人は顔を見合せて、ペロリと舌を出した。巡査も静高生も、まさかインターカレッヂの精鋭が静中に在学していようなどとは夢にも思わなかったに違いない。それにしても有難く思うのは、例え坊ちゃんがいたにしても、ロクスッポ調べもせずに、一方的にこちら側に軍配をあげてくれた駐在さんの措置であった。引きあげて行く駐在さんの後ろ姿に手を合せんばかりに、〃駐在さんよ！有難う〃と兵隊節くずしで唄いかけたものである。

その後オヤジのカミナリがいつ落ちるかとビクビクしていたが、何の咎めもなかったところから推量して、駐在さんが、署長のバカ息子相手では顚末を報告してもオマワリの勲章にはならん！と判断して握りつぶしてくれたものであろう。ほんとに駐在さんよご苦労さん！駐在さんよ有難う！ではあった。それにしてもお利口かバカかはさておき、とにもかくにも不肖なお坊っちゃん！ではあった。

特異な存在
「江の島会」に栄光あれ！

残暑の厳しい九月の第一日曜の二日正午から江の島会の総会が例の江の島恵比寿屋旅館（35期永野清氏経営）で盛大に開かれた。本部からは川村春雄副会長（46期）と杉山茂樹事務局長（60期）関東同窓会から奥野孝副会長（53期）が来賓として見え、それぞれの立場のお話をいただいた。当日の参加者44名、内、県外は16名の多きに達した。中でも女性会員は年々増加し、今年は15名、場内が一段と色めき立った。期の巾の広いのも江の島会の特色の一つだが、中でも80才以上の大先輩が6名も見えられた事は、例年の事ながら江の島会の誇りの一つで他にあまり類の無いことと思われる。28期の大石鵜一郎大先輩は齢90になんなんとされて居り、わざわざ静岡の末広町から壮者を凌ぐ元気な姿を見せられて、「あと10年は欠かさず出席する」と申された。

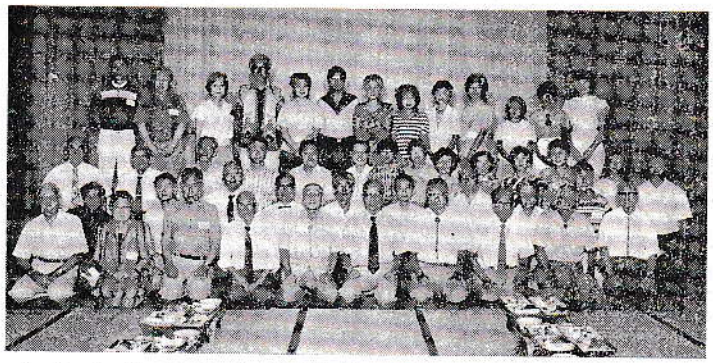
変った所では、35期の故和田顕太郎大先輩の智恵夫人は、この所毎回ご夫妻で参加されて居たが、「私一人でも必ず楽しみにしてお邪魔する」と言って下さった。

遠い所では42期宮崎忠輝さんが浜松から、59期の勝呂清さんは富士から、84期の近藤猛さんは不便な中津から馳せつけられた。

なお上記以外の参加者を敬称を省略して挙げると、

永野清・畔柳安雄・望月賢二（35）平尾鋼之輔（37）井出多米夫・村松直（42）佐伯正剛（51）月見里得知郎（53）長田栄（57）内田武夫・奥沢徹・佐野英一（59）伊東守・柴田克朗（62・63）黒田秀幸・成岡英彦（67）荒谷じつ子・宇田貞子・北村公一・酒井定子・杉山和子・星野敏郎（68）神谷貞子・松島玲子（69）吉田修（70）相川東一・後藤弘枝（71）谷口諄次（72）大岩進（77）白木桃子・滝井弘子（78）滝本智重子（79）今井佳子（84）の皆さんである。

さて、「原点に帰れ」の旗印の下に開催された今総会の中心議題である「江の島会の在り方と規約改正・役員改選」について、発足以来今日に至る迄の江の島会の歩みにしたがってその要点をなるべく簡明に記すと、江の島会はそもそも江の島・鎌倉周辺に在住する同窓を中心に親睦を目的として発足した有志の会でありこれが原点という訳である。当初から「明かるくて、楽しくて、気楽で……」というのが好評で年々参加者も増



え、県内はもちろん県外の賛同者も多くなった。そこで会の体裁を整え規約を設け、初代会長に28期の李家孝氏を戴き、さらに県内に在住・在勤する同窓に積極的に働き掛けて、事実上神奈川支部と言ってもいい位に発展した。

所へ昭和五十二年五月、突然本部から五万円の助成金が届いた。驚きと恐縮とをもって憶測したのであるが、毎回本部から会長や事務局長等も見えてその実情も見て下さっても居るし、発足以来30年に及ぶ実績を評価した上での支部認定の有難い処遇と受取り、同時に会の飛躍的発展の責任をも痛感した。

以後正式に神奈川支部と銘を打ち規約も改正して意気込んだが、しかし同時に運営上・経理上の困難も付いて回って来た。手取り早く言うと、約750有余の県内外の会員全部に出さねばならぬ通知状の印刷代・郵送料だけでも10万近くかかる。本部の維持費、関東同窓会の年会費の手前、屋下屋を架するの愚は講じられない。一方往復はがきで通知しても残念ながら返信は半分、総会参加者は一割に満たない。本部や関東同窓会は性格上や体面上そうも言って居られないのであるが、江の島会はもともと自発的な有志の集まりである。形骸化された会の運営に苦慮し奄々するよりも一日も早く脱却して、たとえ少人数であっても真底から江の島会を愛する強力な存在に立帰ろうとの提案に、参加者全員即座に賛成してくれた。そして規約も静中・静高同窓会「江の島会」の名の下に改正された。因みに役員は会長村松直（42）副会長月見里得知郎(53)監査井出多米夫(42)が重任となり、幹事は人数を減して会長が委嘱することとなった。そこで本部へは、過去7か年に渡るご高配を深謝し、江の島会規約2条（目的）に明記してある「…本部事業に協力する…」ことを固く誓いつつ、九月三日付で「神奈川支部廃止」の届を本部に提出した。どうぞ本部に於かれても意の有る所を諒とされ、ご理解の上やがて40周年を迎える歴史と伝統と実績を有する江の島会に変らぬご指導を賜わらんことをお願いすると共に、全国同窓の有志諸兄に於かれてもご鞭撻とご協力下さるよう切望して止まない。

なお総会懇親会は例によって日の傾く頃一先ず打ち切り、2次会は、終電に近づく頃まで気炎をあげ、来年九月一日(日)の再会を確約しつつ散会した。（村松　直）

『こ　え』

この欄は振替用紙の通信欄で寄せられたもののうち近況報告・随想など掲載しました。これからもどしどしこの欄をご利用下さい。

26　土屋正三

老年のため夜間外出を禁じられていますので会合に欠席をお許し下さい。昼間の会合があれば出席します。

先般九十一才の誕生を迎えましたが、自分では元気のつもりでいます。

35　福田　功

三五回和田顕太郎氏死去の由知りました。余り親しくした人ではありませんが住所電話番号を知りたいので電話でお知らせ下さい。小生不在の事多いので家内か息子にご連絡下さい。

43　小河直人

先日は有難う。毎日暑いことです。御一同の壮健を祈って居ります。

43　坪　晴行

現在、国立水戸病院の名誉院長です。晴耕雨読の生活で元気です。それでも、近くの大学の講義やら原子力安全対策の委員やら、県のいろいろな会議に出席し、「ロータリークラブ」でも活動しています。一度お目にかかりたし。皆様のご健勝祈り上げます。

45　大石　清

暑さ寒さにつけて郷土の便りはなつかしいものです。「岳南健児」のご活躍を祈ります。

45　草野　哲

舌部等前がん性潰瘍のため、名古屋大医学部附属病院に入院、加療、手術の結果、五か月ぶりで七月始め退院。残念ながら初めて総会を欠席しました。目下自宅で療養中です。

45　大石　清

初孫（生後一年半）の面倒を見ていると毎日がアッという間に終ってしまいます。子を持って知る親の苦労がよく判りました。

白内障の手術の順番を待つこと既に一年、早く視力を回復して映画など存分に見たいものだと念願しています。

45　千葉　保次

郷里を離れて、つくづく思います。よくぞ良い地に生れ、優れた学校に学び得たことと。

級友は皆静中の権化のような人達で、同級生のために、同窓のために実によくお世話下さいます。冥利につきると言うべきことでしょう。感謝に堪えません。

46　久留　武

本年六月末、満七十一才直前にして四十八年余のサラリーマン生活を終えました。今後健康に専念する所存です。静中同窓会の益々の繁栄を心から祈ります。

46　大島　正雄

座骨神経痛で治療中です。皆様の御健康を祈ります。何時も御便り有難く厚く御礼申し上げます。

47　亀山　敏男

今年は所用にて出席出来ず残念でした。来年は是非又出席致し度く存じます。

47　吉見　四郎

会社をやめて、二年になりました。元気で時々旅行などして過ごしています。

47　山上　信重

至極元気でおりますが、同窓会の方へは欠席が多いので、今後は出来るだけ出席したいと念じております。どうぞよろしく。

48　河村　祥

読書三昧、時おりのゴルフ、会合などで閑日月を楽しく過ごしています。

50　江川　友治

この間、ハンガリーのブタペストの学会へ行って来ました。ドナウ川を見下ろすホテルのグリルでジプシー音楽を満喫しました。

塩類土壌を見に行った町でコダーイの生家を見ました。コダーイ研究所に日本人の留学生がおりました。

51　伊藤　滋吉

風致地区内で善福寺公園の隣に住んで借景しています。

毎週一回大平山の風致地区内で四面がゴルフ場の栃木の工場へ関東平野を縦断して行っています。

おかげでまだしばらく生きていられそうです。

52　新美　弘

総会出席を楽しみにしていたところ、年がいもなく?ギックリ腰に見舞われ、外出もかなわず、まことに失礼いたしました。先輩・同期の皆様、くれぐれもご健康に留意なされてご活躍のほどお祈りします。

54　八木銓次郎

小生もう一・二年は第三定年勤めで仕事に出ております。今の仕事はNECの下請で、日曜日は出勤となっているので、学校や前職場NHKのOB会も殆んど出られません。下請会社のきびしさをつくづく感じています。

54　安東　哲夫

幹事の皆様方のご尽力に深謝いたします。関東支部の会合には何時も出席できず残念且つ申訳なく思っております。次回には何とか出席したいものと思います。

55　木村　康宏

会になかなか出席出来ませんが盛会を祈って居ります。幹事の方々の御努力感謝してます。

55　戸塚　正五

お蔭で健康で、相変らず自動車保険料率算定会に勤務し、自賠責保険関係の仕事に従事しております。

55　吉田　盛昭

元気に働いて居ます。出張が多く皆さんにお目に掛れず、残念です。お互いに健康には充分注意しましょう。

56　大野日佐太

十七号会報にて、五四期の磯野先生が御研究の成果を新刊されることや五六期の中村治郎兄がケージーファイナンスの創立をされたことを知り御成功を祈ります。

父、日三も九二才、山梨の自宅で元気です。皆様にもよろしくとのことです。

56　清水　逸郎

去る四月気象庁を定年退職し、夏にはオーストリアで開かれた学会に出席しました。帰りに、アルプスの山の娘「ハイジ」の故郷を逍遙し、また、ライン河の船でローレライを楽しみました。

56　中村　治郎

竜爪山の変らぬ姿を新幹線の車窓から仰ぎ見る度に校歌を雄叫びした頃を思い出します。

57　鈴木　明

総会の日はいつも学校か腎透析に当って不参を重ねて居ます。

黒はんぺんフライの安いソースを付けた味は、静中時代のワルガキならではのものです。

それを食べたい執念が、近い将来に何とか参加して執念を満足させたいものと思って居ります。

58　田熊　博邦

年と共に多忙となり、幹事会にも出席出来ず申訳ありません。

御一同の御活躍、心よりうれしき次第です。

夏の甲子園の夢も毎回カラ振りで残念です。御盛会を願っております。

58　猪瀬　忠賀

関東同窓会も十周年を迎えた由発会のころの張りつめた雰囲気を懐かしく思い出します。ますますのご発展をお祈りしております。

小生も静中の門を去って四十年余り、人生の最終楽章を書かなければならない年齢になりながら、惑い多い毎日が続いています。

59　水野　哲也

元気にやっています。

60　斉木　学

日立化成に入社して電子材料を担当して三十年未満、今では時代の花形となりました。しかしこれ迄の苦労は大変でした。同窓の人にも多忙のため失礼しています。今後は同窓会にも出席しますのでよろしくお願いします。

60　里見元一郎

時々、メニエル氏病の後遺症で目まいを感じながら、何とか生き続けています。

60　鈴木　明

札幌へ来て、満6年を過ぎました。定年まであと9年余を頑張るつもりです。

60　逸見　昭三

月見里得知郎氏の随想（研究）いつも楽しく拝見しております。遠い昔、兄達と御訪ねした練兵場のはずれのお宅を想い出し乍ら、長谷通りの大焼薯を新聞紙に包んで帰った頃の自分を重ね合せて、全て懐しく、時の流れの速さに驚いています。益々御元気で。

61　浅野　徹治

大阪へ単身赴任も、はや五年目。京都・奈良のすみずみまで歩きました。皆さんお元気で。

61　西田駿之介

同窓会幹事の皆様に感謝致しております。このごろ同窓会出席不良ですが、常に会報その他送って頂いて有難く読ませてもらって居ります。

63　杉山　邦雄

御無沙汰ばかりして居りますのに、会報をいつも御送付下さいまして有難うございます。母校同窓生の活躍や歴史の流れが手に取るように受止められ、力強く感じて居ります。これを編集せられる事務局の方々に厚く御礼申し上げます。

66　菊田　聡裕

首都高速道路公団から㈱道路計画へ移って満一年が過ぎ、新らしい環境にも馴れました。本年三月には遅ればせながら母校早大より工学博士号を授与され、交通工学の分野で更に発展を期したいと思います。同窓の皆様の御健勝御多幸を祈ります。

66　山梨　裕司

高校野球が始まり母校が出ていないのはさみしい限りですが、浜松商を応援しています。一回戦の大逆転はしばし暑さを忘れさせてくれました。

66　関本　和男

66期生も53才になりました。誠に少年老いやすく、感慨尠からぬこの頃です。今迄多忙を理由に欠席がちだった同窓会も次回からは

出たいと思って居ります。

68　野中　省三

荒谷さんには毎年幹事をして頂き、誠に御苦労様です。

今回は写真まで同封されては恐縮するのみ。皆年をとり、全く昔の顔と違っていること驚くのみです。

68　市来　昭二

静岡での同窓会大会を楽しみにしています。関東同窓会の日時を慎重に選択して頂き度い。

68　望月　節

長女は中学校教諭。末娘も高校二年生になり、生徒会や部活に熱中しています。

68　伊月　喬

目下、単身赴任(仙台)中です。悲哀を謳歌に切り替えようと悪戦苦闘をしておりますが、元気に勤めています。

70　滝口　登

北海道東北地方を転々として、25年余り、関東へやって参りました。サンシャイン60にて同期の大野君に会い、総会に参加する機会を得ました。もし会っていなかったら何処に誰がいるやら、本川根町出身だけに静高は遠いものになっていたかも知れません。人の出合いを大切にしたいものです。

70　井田　勝久

私の住所が、西生田4の20の6なのですが、いつも一〇〇〇の20の6になっていますので直してください。

富田三樹、河合代悟両君の同級生ですが、こんな事ならもっと仲よくしておけばよかったと思っています。

70　宮代　省一

横須賀の海でボラの跳ねるのを横目に、日産自動車追浜テストコースで車を走らせています。

ゴルフの話がありましたら、どうぞ知らせて下さい。

70　河井　良夫

銀座にある松坂屋東京本社におります。おついでがありましたらぜひお立寄りください。

70　大長　智

同窓会に出席出来なかった為会費の納入を忘れていまして失礼致しました。59年度分と一しょに御送り致します。四月から社内異動により、関西国際空港委員会事務局の仕事をしています。

会の発展のために御苦労様でございます。今後共よろしく。

70　大草　敏郎

卯高祭と野球応援にのみ情熱を傾け、あとは無為に過ごせし我が高校生活。いまは祭りもなく、ただ馬齢を重ねるのみ。嗚呼ナニに唄わん「チャッチャッホー」と。

71　林　洋右

まだ現役のアナウンサーとして頑張っています。競馬の実況が主で、週末の土・日曜が稼ぎ?時。従って種々の催事への参加が仕事の都合上、不可能となって欠席しがちです。

ラジオ日本の中央競馬中継を一度は聴いてみて下さい。必ず声を出していますから!

72　仁藤　宏次

幹事さま、いつもご苦労様です。先般は欠席で申訳ありませんでした。

今回大丸では、関西以南への異動を含め、驚異的な数の大異動がありましたが、お蔭様で、引き続き一階で勤務することになりました。お近くにいらした節は是非お立寄り下さい。

73　羽山　武

福岡に転勤し、三年が過ぎました。同期の仲川が東京に帰ることとなり、二人で送別ゴルフをした日に、偶然、池ケ谷章君に逢い、また二人だけの博多支部を継続することとなりました。来福の折には712〇九六一新日軽㈱福岡支店にご連絡下さい。

73　有光　一郎

卒業後30年近くなり近頃とみに懐旧的とは自分ながら苦笑を禁じ得ないこの頃です。特に夏を迎えると一層この感を強くするのは、甲子園に向けて今年の静岡大会を勝ち抜いてくれるかな!　というひそかな期待感を抱くからでしょう。今年もダウン。来年こそは!

千葉県から。

73　山梨　由記

夏の同窓会で、会って飲んで喰うだけでは物足りない。先輩諸氏の講演や勉強会や有意義な催しを実費で開催して欲しい。

73　山田　修

帯広から仙台に転属(勤)になりました。58年度、59年度の年会費を送付します。近くなりましたので、東京にも出掛ける機会があると思います。よろしくお願い申し上げます。

77　深山　源一

徒歩五分の所にある石神井公園の青葉が大変美しい……。

80　玉井　直子
(旧姓　荻島)

現在、東京都立神経病院に勤務しております。失語症その他言語障害の患者さんの治療をしております。

静高の関東支部があることを今年始めて知りました。何となくなつかしく、これからは機会があれ

同窓会コンペなど、ご相談ください。
伊豆大仁カントリークラブ
伊豆大仁開発株式会社
代表取締役　石橋正秋
取締役支配人　安田正弥(66回)
静岡県田方郡大仁町浮橋字南松坂1198－1
TEL　0558—76—2401(代表)

建築設計・監理
株式会社　ユニオン設計センター
代表取締役　成岡英彦(67回)
一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7—14—9　規格ビル
TEL　03—363—8604(代表)

ぼ出席したいと思います。勤務先TEL0423（23）511内線346

80　高橋　勝彦

卒業してから、早いもので二〇年。原子力業界の一員として頑張っています。

80　佐藤　忠誠

年二回静岡からの卯高新聞を受け取るおり、関東同窓会開催を知りながらも連絡方法も判らなかったですが、先日、同期会の開催にて同期生より事務局を教えられました。今後出席致しますので宜しく御願い申し上げます。

97　小沢　靖弘

僕の同級生は就職でたいへんですが、僕はあと2年（歯科大のため）あるので、のんびりとしています。

ゴルフ

予報に反し、秋晴れの伊豆大仁カントリークラブにおいて、第十七回卯高会ゴルフ大会が、去る十一月七日、十名参加のもと行われました。

優　勝　星野敏郎氏（68期）
準優勝　西畑隆志氏（67期）
三　位　野沢正憲氏（64期）

より多くの御参加をお待ちしています。

（成岡英彦）

〝静岡だより〟

母校野球部の近況

〝春の甲子園・選抜大会〟を目指し、静岡高校は今年も東海四県大会静岡県予選、及び本大会を果敢に戦い抜いた。結果としては。東海四県大会でベスト4に勝ち残り、同大会の出場校枠が三校ということを考えると、本来は有望ではあるが、静岡県からは同大会準優勝の浜松商業の出場が〝当確〟なので出場校枠が地域性を重視するので、他県に回される可能性が強いと見られている。

戦績をふり返ると、静岡県予選中部ブロック準決勝で、ライバル静岡商業に逆転満塁サヨナラホームランで苦杯をなめ同ブロック三位となった。この汚名を見事に返上したのが十月六日から行われた県大会の大躍進。まず初戦で富士東高を5－3、二回戦で袋井高を9－6で下した。ここまでは戦前の予想どおり〝良く打つが投手陣は非力〟の展開で、主戦の中村、エース・ナンバーを背負う左腕中野、リリーフ望月をフル稼動の継投策だったが続く準決勝、決勝では投手陣が立ち直りを見せた。

まず準決勝の富士宮北戦では、右腕中村が粘りの投球で五安打の好投、4－2の完投で勝った。続いて、十月十三日に行われた決勝は中部ブロックで〝幻〟の決勝相手だった清水商業との対決。中部ブロック一位でここまで圧倒的な強さで勝ち上がって来た清水商業との対戦だけに接戦が予想されたが、フタを開けてみると9－0静高の圧勝。投げては左腕中野が強打を誇る清商打線を四安打完封に抑え、打っては水野・矢田の三・四番コンビが長打攻勢の大活躍だった。

（写真説明）
東海4県大会2回戦の対愛工大名電。6回裏矢田の中越え2塁打で2者生還する。

春の甲子園への出場校四校を選抜する静岡・愛知・三重・岐阜の東海四県大会は十月二十七日から静岡・島田両球場で開催された。静岡県一位の静高は一回戦は不戦勝。二回戦で愛知三位の愛工大名電高と相対した。点を取っては追いつかれるという苦しい展開だったが、中村－中野－望月の好継投とバックスクリーン横に打ち込んだ百二十米の大ホームランをはじめ、五打点をあげた主砲矢田の大活躍で7－5と愛工大名電高を下した。本来ならばベスト4入りしたこの時点で春の甲子園への〝キップ〟を手中にしたことになるのだが、静岡三位の伏兵浜松商業が優勝候補の筆頭だった享栄商を破ってベスト4に進出したため、甲子園への〝当確〟をかけて両校が十一月三日の準決勝で激突した。

五十七年三月まで浜松商業野球部を率いていた船川監督対上村監督・森下コーチのいわば師弟対決は、総合力では互角と見られていたが、緻密な攻撃・守備を展開した浜松商業が6－4で静高を下した。特に四度の送りバンドを試みてすべて失敗して二封されチャンスの芽をつまれた事が最大の敗因となった。

現在静高野球部は〝夏〟を目指して中野の復調をはじめとする投手陣の強化、緻密な攻撃・守備の完成といった課題の克服を目標にがんばっている。

85期　吉水広（静岡新聞社勤務）

母校の消息は関東の同窓生には特に懐かしいものです。静中静高というとすぐ頭に浮かぶのは野球のことで、会報でも二、三回とりあげましたが、活躍しているのは野球部だけではないでしょうからほかの部も様子もお分りの方はお知らせ下さい。

（編集部）

野間省一君を悼む

わわれれのホープ

鈴木　与平（42回）

野間省一君が亡くなられた。野間君の旧姓は高木、その高木省一君との出会いは、大正十三年の四月、県立静岡中学（現県立静岡高校）へ入学したときである。

高木君は静岡市清閑町の生れで静岡市立城内尋常高等小学校から私は清水市立清水尋常高等小学校からである。彼はD組、私はB組だったが、大勢入学して来た静岡勢のなかでも既に頭角を表していた。風貌がどこか日本人離れし無口のほうで、ややとっつきにくいところがあったが、人の心がわかり洞察力のある、頭の冴えた人だった。

そのころは毎学期ごとに成績順位が廊下に張り出されるのだが、首位は後に日立製作所に入った小沼武君と競いつつ四年を終了、旧制静岡高等学校に入った。

従って同期の臼井君、谷川君、私などは一年遅れており、私はさらに成城高に転じたので、そのころのことは私には判らない。

ただ、当時いわゆる左翼思想は高等学校で盛んであり、大抵の秀才型の生徒は多かれ少なかれ、その影響を受け、学内学外活動に走ったが、彼はその点利口というかマルキシズムも心得ながら、行動するようなことはなかった。

彼は東大法学部在学中、司法・行政の高文をとった。普通の場合内務、大蔵などの官庁へ進む。それを何か満鉄（当時の満洲の国策会社南満洲鉄道）へ入社したのである。これはその時満鉄理事をしていて、後に国鉄総裁を務めた十河信二氏の推薦によるものではあるが、本人にも何か考えるところがあったろうと思う。

彼と十河氏との関係は、それより先、私の二番目の弟清司の家庭教師として拙宅に来ていたころ、私の父と親交のあった十河氏に、私や私のすぐ下の弟要二とともに本郷の十河邸で屢々お目にかかっていたご縁による。

講談社に入ることになったことは、高木君の実兄三吉氏が同社に居られたことからと推察するが、単なる入社でなく、野間家へ入婿するのであるから、本人は相当考えざるを得なかったようで、私の父にも相談があったそうである。

野間家に入り講談社の経営に当ることになった野間省一社長は、業界で頭角を表わし、われわれのホープとしても期待されていたが、昭和四十六年九月脳血栓で倒れた。お見舞にあがったとき、車椅子に乗って出てこられた姿はいたいたしかった。

早く回復されて活躍されることを祈っていたが、勲一等受賞の祝賀会にも遂に姿を見せないまま、五十九年八月十日、不帰の客となったことは誠に残念でならない。

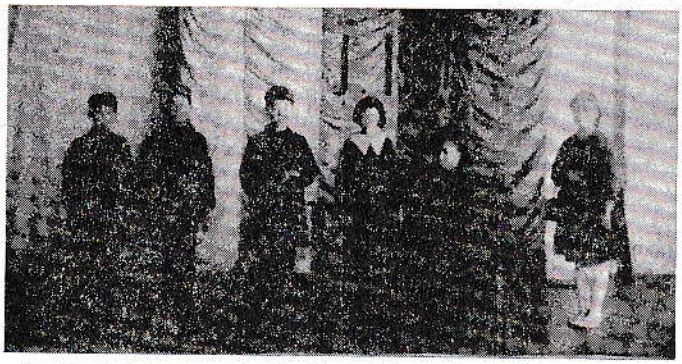
〃マリーの機転〃
野間君の思い出

臼井　茂（44回）

野間君（旧姓高木）が浜松から城内尋常小学校に転校してきたのは四年の新学期だった。

大柄で成績はバツグン、明るい性格でたちまちクラスの中心的存在となった。

大正十年、秋の学芸会で国語読本にのっていた〃マリーの機転〃をやることになり、野間君の役は逃走中のオーストリア兵、野間君を耳のわるい老婆に変装させてドイツ兵の追跡から救う主役のマリーは、クラスでたった一人おかっぱだった鶴丸基代さん、私はドイツ兵の一人でおつき合いし、新装成った歌舞伎座で二回上演（？）した。



野間君はとぼけた身振りで仲々の名演技だった。鶴丸さんは新劇の鶴丸睦彦の妹で、目白に進んでから左翼運動で活躍したが、不幸にも一つ違いの妹督子さんともども夭逝してしまった。

五年になると私たちは進学クラスに入れられた。担任の井出弘三先生はクラスを六人ずつの班に分け、それぞれの班長にグループを指導させ、毎週の成績をグラフにはり出しグループで競わせるという独創的な教え方だったので、私たちのクラスには県内外からの見学者が絶えなかった。野間君と私は井出先生の助手としてテストの問題を印刷する役割だった。

こうして二年間鍛えられた結果全員が静中や県立高女など志望校に入学できた。静中に入った二十数名の中から野間君をトップに五人が東大に進んだから、粒もよくそろっていたわけで、井出先生は永くこのクラスのことを自慢のタネにされていたそうだ。

静中に入ってからも野間君とはよくつき合った。井出クラスの外川誠君の家が熊野神社の前にあって合宿所みたいになっていた。外川君の兄貴に安田屋のソバをよくおごってもらい、野間君とザルの

高さを競ったこともあった。私が陸上競技部と同人誌に熱をあげているうちに、野間君はさっさと四年から静高に入ってしまい、それから大学まで一年あとを、私は谷川脩君と追うことになった。

長い戦争と戦後の混乱が終って野間君と再会したのは、昭和二十六年の暮、JOKRの開局式典が歌舞伎座で行われたときだった。すでに講談社は戦前のイメージを一掃して新しい出版文化の担い手としてすべり出したところで、それから時々おなじみの柳橋の亀清に呼び出されて新しい雑誌について意見を求められたりした。酒はめっぽう強かったが、乱れたところはついぞ一度もみせなかった。出版という窓から世界に眼を向けた巨視的な人だった。彼ほどスケールの大きい人物は日本の出版界にもう出ないだろう。まさに「巨星墜つ」の思いだ。できることならもう十年命永らえて、日本だけでなく、世界の文化振興に働いてもらいたかった。

心からご冥福を祈る。

（写真は学芸会の舞台。右から二人目が野間君、鶴丸さん。一人おいて筆者。）

五九年度会費拠出者

期別

二六　土屋正三
三一　鈴木栄一、塚田英夫
三二　前田鉄三、岡本敏興
三五　永野清、福田功
三八　石割正、大村秀雄、永嶺忠雄
三九　増井四郎、佐野諭吉郎
四〇　野崎操一、杉本四朗、増田完五、伴野三千良、北川二郎
四一　中村安時、朝比奈一男
四二　井出多米夫、岩崎康、岩波信平、田中治、村松直、宮澤次郎、井上寿徳、内田正大、沼津善夫、吉田幸一、国分友美、村上禎威、中嶋敏、柳川太郎
四三　芹沢正壽、西沢純三、吉江誠一、小河直人、三好由三郎、望月孟夫、圷晴行、山村忠雄、清水正照、倉沢栄吉、長戸寛美
四四　臼井茂、佐藤文三、高橋真一、増井三郎、野間省一、小沼武、上野精三
四五　大石清、草野哲、佐野理平、鈴木弥門、田附敏三、堀正治、速水基夫、田代正、須山達夫、石上稔、大石清、竹下定吉、黒田明彦
四六　内山規、大藤道直、田中修三、長浜謙二、久留武、青木清明、山本幹夫、大島正雄
四七　今関智吉、片山正二、亀山敏男、志田千春、杉山栄一、杉江敏男、中村豊夫、星野三郎、山上信重、吉田実、山村俊夫、土井知恵雄、野口真、鳴谷亮一、吉見四郎、田中達夫
四八　伊藤重久、加藤博、原崎進一、福永正美、寺尾睦之助、伏見賢治郎、日比野悦三、黒水高典、岩崎鑑一、河村祥、大橋広世、北村三明、興津幸四郎、松岡喜郎、青木香、近藤市雄、鍋田親一、伊藤徹次郎、上杉一郎、小林道雄、菅沼栄、曽根重四郎、長井広、石田大二郎、陰山修次、浦野庸二、安本久、伴野徳三郎、大津英輔、植木定美、杉本久敬
五〇　森芳夫、江川友治、梅村魁、益田竜也、一一彦、大庭富士夫、深沢八郎、永田徴、山田喜志夫、山本浩、大庭左文
五一　永井五一郎、渡辺功、小塩洋太郎、原崎郁平、寺尾利男、佐伯正剛、河瀬士郎、森弘、山本俊朗、楳田長、飯田鉄雄、伊藤慎吉、渡辺寛孝
五二　苫米地一楼、佐藤昌武、直原澄衛、茂呂茂樹、大草知久、市川雄八郎、綾部立一、川島喜八郎、曽根信一、広川聡、岩本良雄、新美弘、服部雅雄、鼠入武夫
五三　奥野孝、小野一夫、三枝正裕、園田芳男、徳永悠久、橋本久仁寿、益田貞三、松前新太郎、山菅幸雄、月見里得知郎、志田寿一、香林竹男、望月昂、大橋百蔵、谷静夫、稲畑勝、森下洋、島田良彦、渥美政男、鈴木弘雄、宮澤四郎
五四　庵原悌次、高井昂、大藤直久、鈴木猛、澤井潤、安東哲夫、佐野圭司、山田幸作、佐野資郎、大畑忠夫、平林一郎、禰津三朗、杉山茂樹、居初良雄
五五　相川富士雄、高橋恒三、武井富夫、中田千束、中田吉信、長沢栄一、法月重雄、木村康弘、鷲巣英策、吉川鐘介、青木和彦、松井保治、戸塚正五、野中篤、塚越修成、瀬信男、山本武、小沢忠樹、吉田盛昭、相馬英夫
五六　奥野進、清水逸郎、杉原泰二、横森桂、伊東卓爾、小坂椰子朗、中村治郎、山口弘、鈴木源一、高橋四郎、大野日佐太
五七　池谷秀雄、影島利邦、杉山正友、藤巻重男、月見里礼次郎、富田潜、高橋礼久、酒井博、島根光明、坂田秀雄、久保田誠三、岩井平一郎、米沢正次、小花正昭、鈴木明、望月修、相馬巌、小幡真第、渡辺武男
五八　奥野広、林慎、服部健一、沢西浩、望月恵一、島村悟、田能博邦、須山静夫、猪瀬忠賀、鷹森立一、加藤久、伊藤健三
五九　奥沢徹、狩野和男、小花敏郎、高橋裕、水野哲也、内田武二、川田昭、清水汪、酒井哲夫、長谷川邦三、鈴木義男、菅原操、酒井勇、原淳、佐野英一、勝呂清、曲淵景敏、朝比奈正二、富永利夫、内田武男
六〇　上杉重吉、柴田正臣、原俊山崎鏡次、逸見昭三、山本雅之助、原田竜二、鈴木明笠間達男、新間昌輝、大石隆一、斉木学、里見元一郎、堤崇、原善三郎、満間猛、時田正康、井出裕雄、鈴木

光男

六一　高村岳史、坪田昭三、福田英雄、花見久、仲野辰男、赤羽昭二、浅野徹治、芹沢博樹、後藤達朗、西田駿之介、山崎和夫、長瀬脩、大村富士男、大石次男、小久江浅二、伊藤久、鈴木孝、清水照彦、立花幹夫、安原徹治、藪崎昭

六二・六三　布川一夫、大草宏、大竹孝英、大塩幸男、白鳥芳夫、伊東守、北堀勝雄、高田桂造、深見一正、勝山弘之、加藤平三郎、柴田克朗、杉山邦彦

六四・六五　岩本吉雄、仲野実、名波倉四郎、野沢正憲、栗田行雄、増田政雄、渡辺宏一、吉井駿亮、山本和彦、増田誠男、益頭尚文、松下一男、狩野達彦、蛭川博之、神谷武男、永田進一、長谷川直和、望月坦、渡辺寿夫、杉本哲、竹内豊、藤田栄

六六　石川劒二、河守輝雄、田中俊男、武藤勇、山下智康、森山秀夫、三原載、菅原馨、尾入泰彦、中村仲吾、村越立彦、菊田聡裕、加藤昭、江塚弘、安池智策、原常勝、山梨裕司、村松武司、大坪信之、久保泰夫、小林成敏、関本和男、山本敏雄、内田幸雄、永田陽一、辻陽一

六七　大石脩而、岡村英二郎、加藤友行、梶原由三、川上剛二、小坂博、児島英男、成岡英彦、福原享一、矢部隆、吉野享、岩崎為明、黒田秀幸、松本安子、朝比奈正三、増田正高、遠藤一彦、小杉謙一、渡辺真任、滝川博、湯本恭三、長倉孝三、影山友安、黒石聖一、鈴木敏行、小沢皎二、中村次雄、佐藤道雄、石川武治

六八　岩瀬順郎、神保尚司、鈴木直方、立花雍一、星野敏郎、吉崎英輔、荒谷じつ子、鍋田邦彦、中村睦、鈴木俊彦、塚本浩司、藤波真五、杉山忠男、雨宮明生伊月喬、北村公一、佐野川好母、萩原多賀男、望月節森下健、海下順之、福本準一郎、大橋勝弘、纐纈晃生、松下司郎、小林功典、大場正己、武光康之、酒井定子佐野録郎、原野谷由紀子、野中省三、市来昭二

六九　辻照雄、神谷貞子、松島玲子、

七〇　小林孝光、関哲男、長倉良松、渡辺勝美、清水今一郎、藤波はるみ、中馬敏雄、松山多美、鈴木明次、小嶋国彦、石山博、河井良夫、小山清継、宮代省一、大場良臣、水野博司、味岡宏、牧野甫、村上雅一、村松勝治、賀知進、石本明、山本正夫、吉田修、石山宏、大高源之丞、大村政忠、仁科正雄、松浦洋一郎、池ヶ谷禎男、深見明、大山祐司、井田勝久

七一　佐藤利治、実石欣哉、後藤弘枝、山崎恭弘、秋田和男、浦田彰、清智、川上貫三、篠原直、鈴木功、西野章、藤原忠一、小池安満、林洋右

七二　桜井亮介、夏目雅之、木原規之、小林富士男、花田守弘、深田均、山口公子、宗野佳郎、山田勝、石井漱一、笠井康之、仁藤宏次、石川正明、八木伸明、鈴木靖二

七三　近藤守、佐々木勝彦、後藤孝子、中西英一、大村博、永田俊彦、小柳忠義、大石堯史、山本昌秀、深沢靖男、鈴木千明、林さち子、柴山欽伍、山下勇三、山下茂、大村春樹、山田修、望月篤、山本健史、鈴木斉、野桜茂章、小林篤夫、羽山武、山梨由記、有光一郎、小野田幸雄、梶原重則、宗像純司

七四　木村敦

七五　藤倉美耶子

七六　大石直行

七七　加藤重信、大岩蓮、森正毅

八〇　藤江通昌、中川武久、玉井直子、佐藤忠誠、増田安久、角谷勝彦、高橋勝彦

八一　高山貞和、青木隆知、漆畑喜八郎、仲沢幸子

八三　木宮直仁

八五　竹内二士夫、関雅己

八七　平岩正史、巌科名雄、橋村芳一

八九　吉永幸弘

九〇　荒井郁子

九二　光木瓦

九三　野毛宏、岡村幸彦

九四　長島敦子、名取勝子

九五　増田康企、橋本範夫

九六　加藤英樹、萩原厚、山本茂未、杉本耕一、武田邦仁、朝比奈由典

九七　石田雅彦、岩本義徳、大石万里、岩崎保浩、小沢靖弘、前原誠、杉山千晶、仲野由里子、平尾多加子、桑原裕明、大石ミキ、米山麻里、菅沼美幸、梅沢玲子、寺西浩

九八　河村吉輝、重村武、鈴木統之、松本有二、森克祥、秋山竜一郎、大村慎一、下山勇次、仲野裕文、牧野訓明、木野達、鈴木宏之、鈴木竜三、福間将文、牧野達明、秋山千穂、岡部真理子、白鳥雅子、森本香織、大石吉彦、池ヶ谷さえ子、田形淳、服部孝美、鈴木ゆかり

九九　天野嘉久、落合良彦、唐木邦光、小林昇、小林央、新美広、杉山功一、杉山靖芳、竹中教明、藤田直人、三浦一郎、望月竜史、安間聡、小沢真弓、新庄亜由美、平尾直子、町野麻衣子、森光代、望月雅晃、大掛京子、明石修、秋野宏行、渥美隆宏、大関忍、岡田元夫、木村亜樹、小長井英生、佐藤欽久、鈴木正人、関俊行、田中裕一、竹下芳裕、納谷幸男、沼沢浩太郎、馬場厚生、平野裕司、深沢啓介、山本健司、永田徹二、海野晃代、児玉るり子、牧田英子、望月智子、田力道代、久保田、寺尾和之、石川、米山典孝、光信紀彦、杉山正己

名簿補遺訂正表（59,6.—59.11.変更事項　各期内順不同）

22回

増井　清　死去

23回

池田　錫　死去
大竹　十郎　死去

29回

大石　主計　死去

30回

内藤　保吉　死去

42回

内田　正夫　勤務先削除
中嶋　敏　194　町田市玉川学園7-8-22〔0427-25-3106〕

44回

野間　省一　死去

49回

曽根重四郎　223　横浜市港北区下田町3-26-14

51回

佐伯　正剛　223　横浜市港北区下田町1-1-1-210

53回

◎新会員
宮澤　四郎　358　埼玉県入間市小谷町1-3-3〔0429-64-6764〕
◆トッパン・ムーア・フォームプロセス㈱

55回

成瀬　信男　◆笹富士商事㈱〔03-705-1662〕

57回

月見里札次郎　◆〔03-276-8008〕
米澤　正次　142　品川区旗の台6-14-3-103〔03-787-5193〕
◆東京応化工業㈱理事〔044-411-2131〕

61回

薮崎　昭　270　柏市逆井1668-89　●画家〔0473-86-7985〕
芹沢　博樹　252　藤沢市湘南台1-39-10

66回

尾入　泰彦　◆NHK放送センター技術本部・開発技術部〔03-465-1111〕

69回

堀場千賀重　150　渋谷区代々木5-67-8　富アパート15号〔03-460-5277〕
原田　淑子　336　浦和市根岸5-20-4-2-106　◆うらわ朝日編集部〔0488-22-7203〕
松島　玲子　215　川崎市麻生区千代ケ丘2-11-2

70回

井田　勝久　214　川崎市多摩区西生田4-20-6
大山　祐司　281　千葉市朝日ケ丘町3321　にれの木台3-13-104〔0472-75-0516〕

◎新会員
滝口　登　164　中野区中央3-45-24

72回

梶山　勝三　広島に転居

73回

羽山　武　814　福岡市早良区室見1-15-20　◆新日軽㈱福岡支店〔　712-0961〕

◎新会員
梶原　重則　274　船橋市前原東3-7-7　川鉄津田沼寮
◆川崎製鉄物流企画室
山田　修　983　仙台市南目館11-1-103〔0222-37-5059〕
◆陸上自衛隊〔0222-31-1111　内370〕

77回

磯谷　計嘉　171　豊島区高田2-18-15-314〔03-971-8676〕
仲沢　洋文　349-01　蓮田市馬込758-27
石山　健一　359　所沢市上新井1188-18〔0429-22-5392〕

78回

山梨　正雄　355　東松山市大字田木1254-1　桜山台8-20〔0493-35-2159〕　◆東京都心身障害者福祉センター〔03-203-6141〕

81回

仲沢　幸子　349-01　蓮田市馬込758-27

82回

蛭川　篤志　245　横浜市戸塚区弥生台39-14〔045-812-2429〕

91回

望月　一誠　168　杉並区浜田山4-16-4　日産浜田山寮C123

94回

◎新会員
名取　勝也　176　練馬区貫井2-27-15　第三清和マンション403号〔03-990-6876〕
福地　康紀　162　新宿区市ケ谷八幡町16　市ケ谷見附ハイム308

96回

朝比奈由典　167　杉並区荻窪3-10-14　好日荘〔03-398-2917〕
■東京理科大学工学部建築学科
神戸　清雄　静岡へ転居
後藤　陽一　転居先不明
中尾　安志　338　与野市上落合323-4　埼銀与野寮B-336〔0488-52-1253〕　◆埼玉銀行〔0487-71-6311〕
青柳　朱実　168　杉並区永福2-34-11　伊藤荘2F
島崎　妙子　転居先不明
千場　和美　278　野田市上花輪新町35-3〔0471-25-5956〕
◆千葉銀行
牧元　伴江　170　豊島区北大塚3-12-22　◆社団法人日本アイソトープ協会〔03-946-7111〕
大沢　理　153　目黒区祐天寺1-4-5　古川荘〔03-719-5874〕　■東京大学

97回

柳田　行徳　153　目黒区上目黒4-12-4　木場荘101〔03-711-4426〕

98回

鈴木　竜三　〔03-956-9348〕
大村　慎一　氏名の訂正

鈴木雅貴、谷沢善之、丹波真人、野崎俊也、長谷川和也、福泉陽介、福地敏朗、船橋智、増田聡、室田泰志、山本洋一郎、高橋、木村直樹、西沢安彦、大村裕章、興津貴隆、花崎誠、中村智浩、小林香葉乃、佐藤尚代、田中悦子

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1—5—1
TEL (833) 2111 (大代表)

セリ企業グループ

代表者 芹澤正憲 (43回)

㈱銀座瀬里 (573) 4031～3
㈱セリ.エンタープライズ(574)7295～6
㈱タカ.セリ (572) 6881～2
㈱ニュー.セリ (571) 4588・6255
㈱セリ.ブレイング.マシン(462)38-0571(代)

株式会社 東電社

取締役社長 岩波信平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2701 (大代表)

本田技研工業株式会社

川島喜八郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8
TEL (499) 0111 (大代表)

川根銘茶

三保乃園 山菅茶店

山菅章雄 (53回)
(村松正七)

東京都港区南青山1—20—6
TEL 03—403—5760

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井平一郎 (57回)

本社 静岡市国吉田645
TEL 0542 (62) 1111 (代)
東京 中央区京橋1-2越前屋ビル
TEL 03 (272) 4651 (代)

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥野 孝 (53回)
取締役社長 奥野 進 (56回)
取締役副社長 奥野 広 (58回)
本社 東京都台東区寿2—5—12 加瀬ビル
TEL 03—842—6831 (代表)
静岡事務所 静岡市安東2—8—14
TEL 0542—46—9378

建築コンサルタント・設計施行業務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大雄

取締役社長 奥野 孝 (53回)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階
TEL 03—834—5331 (代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶原由三 (67回)

東京都中央区八丁堀2—1—7
神鋼ビル
TEL 03—553—8981 (代表)

総合広告代理店

株式会社 アドプロ

代表取締役 朝比奈正三 (67回)

東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階
TEL 03—254—2171 (代表)